現代日本における「宗教」の意味

木村文輝

一　「宗教」と無宗教

（一）宗教に対する先入観

「宗教」と聞いて、人々はどのような思いを抱くだろうか。ある人は、オウム真理教の一連の犯罪や信者に対する洗脳行為、あるいは、今も世界各地で続発している宗教紛争を思い浮かべて、「宗教は恐ろしいものだ」と考えるかもしれない。しかし、宗教が本当に恐ろしいものならば、世界中の大多数の人々は、なぜ自らの信じる宗教に従って日々を送っているのだろうか。海外旅行に出かける人々は、なぜキリスト教の教会や仏教の寺院など、様々な宗教施設を好んで訪れるのだろうか。多くの日本人は、なぜ神社のお祭りやお寺で行われる葬儀に平気で参加するのだろうか。考えてみれば、「宗教は恐ろしい」と言う時に、私達は世界中の人々の日常的な生活や、自らが何気なく過ごしている日々の営みに目を向けることなく、ニュースで取り上げられるような特殊な事例ばかりに注目し、それを一般化してしまっているのではないだろうか。それはあたかも、数人の日本人が残虐な行為を行ったからと言って、「日本人は恐ろしい」と一般化するようなものである。

また、ある人は、あらゆる事柄を科学的に解明することを目指す現代において、その存在を科学的に証明できない神や霊魂の存在を認め、それらに祈りを捧げることは、古代的、もしくは中世的な思考にすぎず、極めて時代遅れの迷信だと考えるかもしれない。しかし、それならば、海外のスポーツ選手が試合の前に十字を切って神に祈りを捧げるのは、時代遅れの所作なのだろうか。アメリカ合衆国の大統領がその就任演説を「神のご加護を」という言葉でしめくくるのは、迷信がかった表現なのだろうか。わが国の受験生が試験を前にして天神さまにお参りにいくのは、無駄な行為なのだろうか。考えてみれば、科学がどれほど進んだところで、私たちは未来を完全に予測することはできない。それ故に、誰もが未来に対して不安を抱き、その不安を少しでも鎮めるために、神仏にすがりたいと思うのではないだろうか。

さらにまた、ある人は、そもそも自分は宗教に対していかなる関心もないと言うかもしれない。しかし、そのように言う人も、近親者のお墓参りに行ったことはないだろうか。暗闇の中で、そこには何も存在しないと頭では理解していても、やはり不気味な思いを感じたことはないだろうか。そして何よりも、死に対して言いようのない不安を覚えたことはないだろうか。考えてみれば、生きている者は誰もが死から逃れることはできない。そのために、人は死を理解し、死を納得し、死の不安を乗り越えるために、死後の世界を思い描き、その世界をつかさどる神仏の存在を考え出した。さらに、そうした神仏の計らいによって素晴らしい死後の世界に導かれるために、神仏に気に入られるための理想の生き方を模索し、それを多くの人々が共有することによって、その地域のし

きたりや道徳、そして、文化が形成された。それ故、それぞれの地域の文化の形成においては宗教が大きな役割を担っており、文化と宗教は切っても切れない関係にあると言っても過言ではない。つまり、私達は日々の生活を送る中で、宗教と無関係ではいられないのである。

（二）無宗教の解釈

正月には初詣に出かけ、春秋の彼岸には墓参りに訪れる。願い事があれば神仏に祈りを捧げ、厄年にはお祓いを受ける。そして、子供が生まれれば神社にお参りに出かけ、人が亡くなれば葬儀を行い、年忌法要を繰り返す。このような、日本文化に溶け込んだ様々な行いが、宗教的なものであることは確かである。その意味で、私達は一年間を通して、さらには一生涯にわたって宗教的な行いを繰り返していると言えるだろう。

それにもかかわらず、多くの日本人は自分が無宗教であると考えている。その理由について、まずは二人の研究者の説明に触れておこう。

阿満利麿氏は『日本人はなぜ無宗教なのか』（一九九六）の中で[1]、宗教を創唱宗教と自然宗教に分類するという、宗教学の理論を援用して日本人の無宗教観を読み解いた。すなわち、現代の日本人は、特定の人物が特定の教義を唱え、それを信ずる人々が集まって成立する創唱宗教を好まない。一方、初詣や墓参などのように風俗や習慣となってしまった宗教は「宗教」ではないと思いこむことで、自らの行動を「無宗教」と呼んでいる。しかし、それは自然発生的に成立し、その創始者を特定することのできない自然宗教と呼ばれるものである。つまり、日本人は「無宗教という名の宗教心」を持つ「自然宗教」の信者だというのである。たしかに、日本国内に多数存在するお寺は仏教のものであり、それは釈尊によって始められた創唱宗教である。しかし、我が国の仏教は「葬式仏教」とも称される特殊なものであり、それは「自然宗教」のもつ先祖崇拝や霊魂観に仏教の衣を着せたものにすぎないと評されている。

一方、島田裕巳氏は『無宗教こそ日本人の宗教である』（二〇〇九）の中で[2]、日本人が「宗教」という言葉から思い浮かべるのは、毎週日曜日に教会に通うキリスト教徒や、一日五回の礼拝を欠かさないイスラム教徒の姿であると指摘する。それは、現実から遊離したイメージにすぎないにもかかわらず、多くの日本人は、自らがそれほど宗教に対して真摯でないばかりか、複数の宗教を無節操に取り入れていることに劣等感を抱いてしまう。そのため、自らの立場を自嘲的に「無宗教」と表現しているのである。だが、その一方で、宗教にもとづく紛争やテロ行為が続発し、それぞれの宗教が排他性を強めていく中で、日本人は自らの「無宗教」に誇りを抱くようにもなっている。と言うのも、「無」という言葉は何らかの限界やしがらみから解放されることを意味しており、それ故に、「無宗教」は一つの宗教のみを絶対視して他の宗教を排斥する姿勢ではなく、自らの信仰を曖昧にし、宗教によって自己と他者を区別しない立場を表すことになるからだというのである。

この二人の主張に共通する点は、日本人は「無宗教」という言葉で自らの宗教を表しているという指摘である。彼らの主張のすべてに同調するわけではないけれども、それらはおおむね説得力のあるものだと言えるだろう。ただし、この両者の著作をはじめとして、日本人の無宗教観を論じた種々の考察では、いずれもある重要な論点に関して、十分な検討がなされていないように私には思われる。それは、「無宗教」という

言葉によって否定されている「宗教」の意味である。日本人は、そもそも「宗教」という言葉をどのように捉えているのだろうか。本稿では、現代日本人の「無宗教」観を理解するための手がかりとして、この問題の検討を行うことにしたい。

二　四つの「宗教」

（一）中立的な「宗教」

「宗教」という言葉を語る時、私たちは常にその言葉に同じ意味を込めているであろうか。その言葉を用いる者自身は、必ずしもその違いを自覚していないかもしれない。けれども、そこには状況に応じて異なったニュアンスが込められているのではないだろうか。私は、この言葉には少なくとも四種類の使い分けがなされていると感じている。

一番目の用法は、極めて一般的なものである。例えば、「あなたは何か宗教を信仰していますか」という質問がなされた時、多くの人々は「仏教」とか「キリスト教」という名前を答えようとするだろう。このように、「宗教」という言葉で、ある固有の名前を与えられた思想体系を指し示そうとするのがこの用法である。ここでの「宗教」は、先に阿満利麿氏の見解の中で触れた、創唱宗教と自然宗教という違いを問題にしない。創唱宗教に属する仏教やキリスト教であっても、あるいは自然宗教に属する神道やヒンドゥー教であっても、それに対する固有の名前が与えられていれば、ここで言う「宗教」の要件を満たすことになる。しかも、その場合、次項以下で触れるような一部の例外を除けば、「宗教は恐ろしい」とか「宗教はすばらしい」という価値観が働くことはなく、「宗教」という言葉が中立的な立場で用いられることになる。そこでは、あたかも「私は日本人だ」とか「私はアメリカ人だ」と言うのとまったく同じように、「私は仏教の信者だ」とか「私はキリスト教を信仰している」という使われ方がされるにすぎないのである。

ただし、このような意味で「宗教」という言葉が用いられる場合、多くの人々は無意識的に、一人の人が同時に二つの宗教を信仰することはできないと考えがちである。山折哲雄氏の言葉を借りれば[3]、こうした個別の「宗教」は「あれか、これか」という二者択一的な選択を迫られるべきものであり、「あれも、これも」という態度にはなじまないものだと考えられる傾向にある。そのために、神さまと仏さまに対して同じように祈りを捧げている多くの日本人は、自らの信仰する対象を「仏教」か「神道」かのいずれかに分類することができず、特定の宗教に偏っていないという意味で、「無宗教」という選択肢を主張することになるのである。

（二）恐ろしい「宗教」

「宗教」という言葉の二番目の用法を考えるためには、例えば次のような表現を考えてみよう。「最近、Aさんは何かの宗教に入ったようだから、近づいたらあぶない。気を付けた方がいいよ。」このような表現は、日常の何気ない会話の中で時おり耳にするものである。しかし、その場合の「宗教」という言葉には、明らかに否定的なニュアンスが込められている。ここには、本稿の冒頭で述べた「宗教は恐ろしいものだ」という意識と共通するものがあるだろう。しかも、「宗教に入る」と述べられていることからも窺われるように、この場合の「宗教」という言

葉は、「宗教団体」、もしくは、ある特定の宗教を信仰する人々の集まりを表していることが推測される。つまり、この表現の内容は、正確には「最近、Aさんは何かの宗教団体に入ったようだから、近づいたらあぶない」ということになる。

しかし、「宗教団体」、もしくは、ある特定の宗教を信仰する人々の集まりは、常に恐ろしいものであろうか。例えば、日本人の多くは、自らが特定の「宗教団体」に関わっているとは考えないだろう。しかし、その多くの人々はどこかのお寺の檀家となっており、そのお寺の住職は、たいていの場合、曹洞宗とか浄土宗などの宗派、言い換えれば、ある特定の宗教団体に属している。同じように、神社に奉仕している神職も、神社本庁などの宗教団体に所属しているのが一般的である。つまり、お寺や神社にお参りに行く人々は、たとえそれが間接的なものではあれ、知らず知らずの間にそれぞれの「宗教団体」と関わりを持っているのである。それにもかかわらず、その人々は自らの旦那寺の住職や神社の神職、あるいは、そうした住職や神職と懇意になっている自らが「恐ろしい」世界に足を踏み入れているとは考えないだろう。言い換えれば、仏教の各宗派や神道という伝統的な宗教団体は、一般に「恐ろしい」ものとはみなされていない。それどころが、そうした宗教団体は、それ自体が「宗教団体」としては認識されていない。このことも、お寺や神社にお参りに行く人々が、自らのことを「無宗教」だと考える一因になっているだろう。

そもそも「宗教団体」が恐ろしいものだと考えられる場合、それはいわゆる新興宗教に関わるものである。ただし、ここで言う新興宗教とは、誕生から百年以上の歴史を経て、社会の中で既にその地位を確立している天理教や大本教などではなく、社会的な認知を十分に得ていないさらに新しい宗教である。このような宗教の団体は、なぜ恐ろしいものだと思われるのだろうか。たしかに、オウム真理教の影響を否定することはできない。騙されて入信させられたとか、洗脳を受けたなどという報道を思い起こせば、誰もが新興の宗教団体に警戒心を起こすのは当然である。しかし、すべての新興宗教団体が、そのような犯罪まがいの行為を行っているわけではない。

伝統的な宗教団体と新興のそれとを比較した場合、決定的に異なるのは、それが「開かれた集団」か「閉ざされた集団」かという点である。ただし、この区別には幾つかの側面が含まれている。

まず第一は、それぞれの施設への入りやすさである。例えば、お寺や神社の境内は誰もが自由に出入りできるのに対して、新興宗教の施設はメンバー以外の者にとっては立ち入りがたいものである。もっとも、お寺や神社の場合でも、その建物の中に入ることは難しい。しかし、そこには広々と開放的な境内が広がっている。このことが、お寺や神社に「開かれた場所」というイメージを与え、人々の警戒心を解くことに貢献しているだろう。

第二は、メンバー相互のつながりの緊密さである。お寺や神社に集まる人々は、必ずしもお互いに個人的なつながりを持っているわけではない。そこでは、それぞれの人々がばらばらに集まっているだけであり、誰もがそこに加わることを排除されない。それに対して、新興宗教の施設では、自覚的にその宗教を選択した人々が集まっている。そのため、その人々の間では連帯感が生まれている一方で、そのグループに加わる意思のない人は、そこに加わりづらい閉鎖的な雰囲気を経験することに

なるだろう。

第三は、歴史や文化とのつながりの強さである。すなわち、神仏の存在は長い歴史の中で日本の文化の中に溶け込んでおり、お寺や神社は誰にとっても見慣れた風景になっている。それ故、これらの存在に違和感を覚える人はいない。一方、新興宗教の教えや施設は、誰もが認め得るような歴史的かつ文化的な所産とはなっていない。そのため、それらの存在は、一般の人々にとっては依然として異質なものであり、近寄りがたいものという印象を与えることになるのである。

さらに第四は、それぞれの思想や教義のもつ普遍性である。仏教や神道の思想や教義には、数百年以上にわたって実に多くの人々の批判や考察が加えられている。それ故、その内容はいかなる人に対しても、なにがしかの説得力を持ち得る普遍性を獲得している。それに対して、歴史的な蓄積をもたない新興宗教の思想は、教祖の個人的な主張が一方的に語られるのみである。たとえその内容に外部の人からの批判が加えられようとも、教祖はそれに対する反論を行うばかりで、その教義に普遍性が加わることはないだろう。つまり、そのような思想に同調するのは、その教祖を信仰する内部のメンバーのみであり、閉鎖的な傾向がいっそう強められることになる。

そして第五は、それぞれの団体の情報開示が十分になされているかという点である。伝統的な宗教団体は、これまでにも様々な角度からその紹介がなされており、その情報は十分に「開かれたもの」となっている。たとえそれぞれの団体の中で外部との接触を禁じた修行が行われていようとも、その情報が既に開示されているおかげで、その修行に対する疑念が外部の人々から提起されることはない。それに対して、新興宗教団体の情報は、マスコミによる興味本位の報道か、さもなければ教団自身の我田引水的な広報によって広められているばかりで、「閉ざされたもの」のままである。そのような状況であれば、新興宗教団体が、外部の人々にとって理解しがたい「恐ろしい」集団となることは避けられないだろう。

だが、ここで考えてみれば、そもそも同じ価値観を持つ人々の集団は、多かれ少なかれ閉鎖性、もしくは排他性を持つものである。例えば、「オタク」と呼ばれる人々の集団は、今でこそ一定の市民権を得たように思われるけれども、一九八〇年代にはサブカルチャー的な趣味という特殊な価値観を持つ人々の閉鎖的な集団として、侮蔑と警戒の入り混じった視線を向けられていた。さらに、少々極端な例を挙げれば、サッカーが好きで、朝から晩までサッカーに興じる人々の姿は、それにまったく関心のない人から見れば理解しがたいものに映るだろう。また、この人々が連日サッカーのみに打ち込んで、外部の人々との交流をいっさい持とうとしなければ、外部の人々はこの集団を排他的で奇異なものと思うかもしれない。メンバーが相互に緊密すぎる関係を保ち、外部の人々の加入を妨げるような雰囲気を持つ集団。しかも、その集団に属する人々の考えが外部の人々の共感を得ておらず、そのための情報開示さえもが不十分な場合には、「恐ろしい」集団とみなされるのもやむを得ないであろう。新興宗教団体は、まさにその典型的な例である。のみならず、宗教は人々の心の内面が問題となるために、外部の人々がその集団に属する人々を理解することは一層難しい。ここに、「宗教団体は恐ろしいものだ」という一方的な認識が生まれることになるのである。そして、自分はそのような宗教団体とは関わっていない、もしく

は、関わりたくはないという思いが、自分は「無宗教」だという表現につながるのではないだろうか。

（三）評価される「宗教」

さて、「宗教」という言葉の三番目の用法を検討するためには、次のような表現を考えてみたい。「私の祖母は宗教に熱心です。毎朝お寺にお参りに行って、家族の幸せをお祈りしてくれます。」この場合、「だから、祖母はあぶない人です」とはならず、むしろ、「祖母はとても優しい人です」と続くだろう。つまり、ここでは「宗教」という言葉に肯定的、もしくは好意的なニュアンスが込められているのである。また、ここで用いられている「宗教」という言葉は、何らかの存在に祈りを捧げる行為、もしくはそれを支える信仰心を表していると考えられる。

ただし、その祈りを捧げる対象が、一般的に認知されていない新興宗教の本尊である場合、この表現もたちまち否定的なニュアンスを持つことになる。しかも、その場合には、「宗教」という言葉も先に論じたような「宗教団体」への帰属という意味になるだろう。「宗教」という言葉が肯定的に用いられるためには、その祈りの対象が、お寺や神社に祀られている伝統的な神仏、または亡くなった近親者でなければならない。言い換えれば、そのような祈りの対象は、「祈りの対象」として誰もが認め得るもの、すなわち、それに対して祈りを捧げることが、社会的な通念として認知されているものでなければならない。その対象に祈りを捧げる行為が、周囲の人々に不信感や嫌悪感を与えないこと。それが、この場合の必須の条件である。

とは言え、そのような祈りの対象は複数存在してもかまわない。それどころか、「宗教に熱心」な人々は、そこにどのような仏さまや神さまが祀られているかということを意識することなく、様々なお寺や神社で同じように祈りを捧げることが普通であろう。それ故、彼ら自身が自らを特定の宗教団体に関与しているとか、何らかの「宗教」の信者であると認識しているかどうかは甚だ疑問である。つまり、このような「宗教に熱心」な人々も、自らの宗教を聞かれた時には「無宗教」と答える可能性が極めて高い。ここに、日本人の「無宗教」意識の特徴が端的に表れている。

けれども、「宗教に熱心」な者が、周囲の人々から好意的な眼差しを向けられるためには、むしろその程度である方がよいのかもしれない。わが国において、特定の仏さまや神さまのみを選別し、排他的にその対象のみに祈りを捧げる姿は、場合によっては狂信的との印象を周囲に与え、警戒心を抱かれることになりかねないのである。

（四）無自覚の「宗教」

「宗教」という言葉の四番目の用法は、必ずしも一般的なものではない。それは、自らのことを「無宗教」だと称する人々、言い換えれば、特定の宗教への帰属意識を持たない人々や、さらには、毎日のように神仏に祈りを捧げるほど「宗教に熱心」ではない人々さえもが、先に述べたような初詣や墓参などを行う姿を表す用法である。そうした行為を、多くの人々はその意味を明確に自覚した上で行っているわけではない。それ故、「無宗教」という認識につながる。けれども、それらの行為を行わないと、何となく落ち着かないような不安な気持ちになることもたしかだろう。これらの行為は、いわば日常的な習慣、あるいは社会的な

通念として、人々の生活の中に完全に浸透しているのである。しかし、考えてみれば、神仏に祈りを捧げたり、死者の供養を行うという行為が、まったく宗教性を帯びていないということはあり得ない。つまり、それらは無意識的な宗教行為、あるいは無自覚的な宗教心の表れと言うことができるだろう。このような「宗教」は、しばしば「見えない宗教」と呼ばれている。

この「見えない宗教」という表現を最初に用いたのは、近現代の欧米社会における宗教の「衰退」を分析したトーマス・ルックマン氏である。[4] 同氏は、一般に「衰退」していると評されていた欧米社会の「宗教」とは、キリスト教会とそれが提供する「公式的な」教理への人々の帰属のことであり、現代における宗教的基盤は「私的な」領域、つまり個人の生き方の中に存在している。人々は、いろいろな宗教的な主題を様々な領域から自主的に選択し、心もとない形ではあるが、それらを一つにまとめあげることで自らのアイデンティティの基盤にしていると論じている。そして、このように個人の中に内面化された宗教を、ルックマン氏は「見えない宗教」と呼んだのである。

厳密に論ずれば、同氏の提起した「見えない宗教」と、ここで私が用いている用語との間には、若干の相違があることは認めざるを得ない。けれども、「あなたは何か宗教を信仰していますか」という質問が出された時に、その回答として仏教とかキリスト教という個別の「宗教」の名前を選択できず、多くの人々が「無宗教」と答えている我が国の状況は、「宗教」をキリスト教会と一体視しており、それ故に、人々の教会離れを「宗教」の衰退と評した欧米社会のそれと共通すると言えるだろう。反対に、多くの日本人が神道や仏教、さらには儒教や道教をはじめとする様々な「宗教」の伝統的教義の中から、いろいろな宗教的な主題を自主的に選択し、それをまとめることによって自らの日常生活の基盤としている状況は、ルックマン氏が欧米社会の事例にもとづいて提示した「見えない宗教」という概念と重なり合うものである。

しかも、このような「見えない宗教」は、単に初詣や墓参などという具体的な宗教行動のみに表れるものではない。それは、より根源的に、人々の日常的な意識そのものを決定するのでもある。このことに関連して、以前、私の講義に参加して下さっていた社会人聴講生の方から、次のような話を伺ったことがある。それは、その人がアラブ地方のある国の空港で、入国審査の列に並んでいた時のことである。その人の前にいたアメリカ人の女の子が、小脇に人形を抱えていた。すると、審査官はその女の子から人形を取り上げて、その頭部を無造作に胴体から引きちぎると、そのまま捨ててしまったというのである。

この審査官の行為は、たとえ人形といえども、人間が生き物の姿を造形してはならないというイスラム教の教えに従ったものにすぎない。けれども、この話を聞いた時、その講義の参加者は一様に顔をしかめた。日本人の多くは、あらゆるものに生命が宿っているという考え方に親しんでおり、とりわけ人形を粗末に扱えば、その「タタリ」があるのではないかとさえ恐れている。だからこそ、人形を処分する際には丁重な供養を行っているのであり、人形の頭部を引きちぎるという行為はタブー視されているのである。

このような考え方の違いも「見えない宗教」の一環である。ただし、日本人の「見えない宗教」が、神道に由来するものなのか、それとも仏教に由来するものなのかと問うことは無駄である。「宗教」という言葉

は、単に「神道」とか「仏教」、あるいは「キリスト教」という特定の「宗教」を表すものだと考えるべきではない。むしろ、そうした多様な宗教から様々な要素を自主的に選択し、それらをまとめることで、自らの思想や行動に方向性を与えることになる無自覚的な基盤、すなわち「見えない宗教」という意味を視野に入れておくことが、現代日本人の宗教観を理解するためにも欠かせないのである。

三　「宗教」の呪縛

「宗教」という語は、もともとは中国仏教において、言葉では表現し得ない真理を表す「宗」と、真理を伝えるための言葉を表す「教」という二つの語を結び付けた特別な用語法から始まったという。[5] つまり、「言葉で表現し得ない真理を、あえて表現した言葉」、もしくは、「言葉で表現し得ない真理と、真理を表現した言葉」という意味である。ただし、この用語法は、現代におけるそれとはまったく異なるものである。

この「宗教」という言葉が現在の意味で用いられるようになるのは、明治維新前後に、それが religion の訳語として使用されるようになってからのことである。その最初期の使用例には、後に初代文部大臣を務めた森有礼が、『航魯紀行』の中で慶應二年（一八六六）八月二四日に、「此國ニ者種々の宗教あり、内としてグリーキ［ローマンカソリックと大小異動］といふ宗旨甚だ発擴せり」と記している一文がある。[6] しかし、religion の訳語には、その後も様々な言葉が用いられた。「宗教」がその訳語として定着するのは、明治十年代の中頃と推測されている。ただし、そこに込められた意味合いは、その語の使用者によって、あるいは時代背景によって、明治時代後半まで変化し続けた。のみならず、太平洋戦争が終結し、日本国憲法が発布された後にも、それはさらなる変化を遂げることになる。

けれども、ここではその詳細に立ち入ることは避けたい。[7] 本稿の目的は、このような歴史的な変遷を経た上で、現在の私達が用いている「宗教」という言葉の使用法を検討することであった。そして、そこにはこれまで見てきたように、少なくとも四通りの使い分けが存在することが明らかになった。

第一は、仏教とかキリスト教というように、ある固有の名前を与えられた思想体系を、中立的な立場から表す用法である。その場合、多くの人々は、一人の人が複数の宗教に関与すべきではないと考え、神さまと仏さまを同じように崇拝する自らのことを「無宗教」と呼ぶことになった。第二は、「宗教」という言葉で「宗教団体」、もしくは、ある特定の宗教を信仰する人々の集まりを表す用法である。これが、「宗教は恐ろしい」とか「あぶない」という先入観を与える場合の用法である。そのため、人々はそのような「宗教」に自分が関わっていないことを示すために、「無宗教」という表現を用いるのである。第三は、「宗教」という言葉で神仏に対する信仰心を表す場合である。ここでは、「宗教」という言葉が肯定的に捉えられることが多い。ただし、その場合でも、たいていの人は様々な神や仏を区別することなく崇拝しているために、自らのことを「無宗教」だと表明する。そして、第四は、いわゆる「見えない宗教」である。すなわち、元来は何らかの宗教に由来する日常的な習慣や社会的な通念を、「宗教」という範疇に含めた用法である。しかし、そこに含まれる事柄は、その多くが人々の生活の中に浸透し、文字

どおり「見えない」もの、言い換えれば無自覚なものになっている。そのために、人々はそれを「宗教」的なものとして認識することなく、自らのことを「無宗教」と評することになるのである。

このように見てくると、現代の日本人は、実際には極めて宗教的な生活を送りながらも、「宗教」という言葉に込められた暗黙裡の意味づけにからめ捕られて、自らのことを「無宗教」と言わざるを得なくなっていることが窺われる。すなわち、日本人は真の意味で宗教と無関係に暮らしているのではなく、「宗教」という言葉の呪縛によって、言葉の上で「無宗教」となっているにすぎない。つまり、現代日本人の「無宗教」観を理解するためには、宗教をめぐる我が国の歴史的な変遷や、自らの信仰を明確にしようとしない国民性に注目するのと同様に、「無宗教」という言葉によって否定されている「宗教」の意味を明らかにすることも必須の課題なのである。

注

（1）阿満利麿『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書（一九九六）。ちなみに、阿満氏は日本人の無宗教観が生まれた経緯を三つの観点から論じている。第一は、葬式仏教によって死後の不安が取り除かれることによって、日本人は現世を肯定する「浮き世」の人生観を抱くようになり、キリスト教のような絶対的な救済者を必要としなくなったこと。第二は、キリスト教の伝播を抑え、天皇中心の国家を目指した明治政府の方針で、「宗教」は個人の内心に関わる「私事」とされたのに対して、神道は天皇の祖先神を祀るものであり、国家の掟であって宗教ではないとされたこと。第三は、近代以降、共同体の中で穏やかな暮らしを望む人々は、伝統的な風習を重んじる平凡な日常生活を尊重する一方で、特定の教えに従うことで、これまでの生き方を否定するかもしれない創唱宗教には距離を置くようになったことの指摘である。

現代日本における「宗教」の意味（木村）

（2）島田裕巳『無宗教こそ日本人の宗教である』角川書店（角川ONEテーマ21、二〇〇九）。

（3）山折哲雄『宗教の力―日本人の心はどこへ行くのか―』PHP新書（一九九九）二六頁。

（4）トーマス・ルックマン『見えない宗教―現代宗教社会学入門―』（赤池憲昭、ヤン・スィンゲドー訳）ヨルダン社（一九七六）。

（5）川田熊太郎『仏教と哲学』平楽寺書店（サーラ叢書、一九五七）、中村元「「宗教」という訳語」『日本学士院紀要』四六（二）（一九九二）を参照。

（6）大久保利謙編『明治文學全集　三　明治啓蒙思想集』筑摩書房（一九六七）二五一頁。

（7）明治時代における「宗教」という言葉の使用法については、山口輝臣『明治国家と宗教』東京大学出版会（一九九九）、磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜―宗教・国家・神道―』岩波書店（二〇〇三）、池上良正他編『宗教とは何か』（岩波講座宗教第1巻）岩波書店（二〇〇三）、島薗進・鶴岡賀雄編『〈宗教〉再考』ぺりかん社（二〇〇四）、星野靖二『近代日本の宗教概念―宗教者の言葉と近代―』有志舎（二〇一二）などが詳細な検討を行っている。